



TITLE:

第43回岐阜外科集談会

AUTHOR(S):

CITATION:

第43回岐阜外科集談会. 日本外科宝函 1967, 36(3): 387-388

ISSUE DATE:

1967-05-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/207372>

RIGHT:

第 43 回 岐 阜 外 科 集 談 会

日 時：昭和41年11月16日

於：岐阜医大丹羽講堂

1. Kiel-bone を使用した左上腕骨孤立性骨嚢腫の1例

岐大整形外科

佐々木 晃，武内章二

15才，男子，昭和40年12月9日，サッカー練習中，左上腕を打撲し，レントゲン検査で左上腕骨孤立性骨嚢腫による病的骨折と診断し，嚢腫掻爬術後Kiel-bone移植術を施行した1例を報告する。

2. 最近経験した無尿病病例について

岐大泌尿器科教室

篠田 孝，磯貝和俊，劉 自 覚

1965年7月以来当教室において経験した7例の急性無尿について述べた。

7例中3例は腎性無尿で，その直接原因は1：右結核腎切除術後（全麻），2：急性腎炎と風邪の合併，3：前立腺切除後の膀胱腹壁瘻切除術後（腰麻）で，第1例はイミダリン，カリクレン（末梢血管拡張剤）の投与によつて利尿を来した。第1・2例は回復したが，第3例は強度の腎盂腎炎で死亡した。

他の4例は閉塞性無尿で，それ等の原因は1：逆行性腎盂撮影，2：子宮全剝時の両側尿管結紮，3：右尿管結石と回盲部腫瘍の左尿管への浸潤圧迫，4：両腎結核と尿管狭窄によるもので，何れも泌尿器科的処置によつて回復した。

3. 尿道下裂に対する Denis-Browne 氏法手術経験（再手術例について）

岐阜市民病院泌尿器科

尾 関 信 彦

幼児（4才6ヵ月）と成人（22才）の2例の再手術を要した下裂に対して，Denis-Browne氏法を行なつた症例について，2,3の点を検討した。いずれも他医にて前者は1回，後者は4回の尿道形成手術（術式不明）を受けているが，術後再び尿瘻孔を形成したものである。このような症例には，Denis-Browne氏法の，いわゆる二重固定縫合が最も行ない易く且つ合理的で，種

々の事項を注意深く守つて手術を行なえば成功率の一段と向上する簡単な術式であろう。

4. 輸尿管結石と誤つた腎形成不全を伴つた卵巣皮様嚢腫の1例

大垣市民病院外科

森 直之，蜂須賀喜多男，森 直和
加藤 量平，石川 覚也，村瀬 允也
田本 泉司

我々は，「左輸尿管結石症」の診断にて手術を行なつた結果，結石と思われたものが実は卵巣皮様嚢腫の嚢牙であり，しかも左側腎の形成不全をも合併していた興味ある1例を経験したので，単腎症の文献的考察を加えて，ここに報告いたします。

5. 女子のヘルニアについて

岐阜市民病院

島田 脩，河村義博，○安江幸洋

我々は1959年より1966年9月末の7年9ヵ月間に鼠径ヘルニア男子390名，女子107名及び大腿ヘルニア女子25名，男子1名の手術を行ない，ヘルニアの発生部位，発病時期，手術年齢，合併症等につき統計的観察を行ない又特に女子鼠径ヘルニアに対し129回の手術中93回にコッヘル氏重積法を行ない，良好の成績を見た。卵巣を内容とする滑脱ヘルニアは107例中7例65%に見られ，手術手技その他考察を加えた。又同期間内的大腿ヘルニアの手術は女子25例，男子1例に行ない，高齢者に多く，合併症は嵌屯7例，大網癒着8例で1例に腸切除を行なつた。

6. 相次いで起こつた両側膝窩動脈栓塞症の1症例

岐大第2外科

三輪 勝，佐藤 収，二村敦朗

症例 44才，男子，会社員，5～6年前より僧帽弁狭窄症，心房中隔欠損症の診断の下に薬物療法中。41年5月27日夕刻より突然に腹部激痛，肛門出血，次の

で6月2日午後4時頃より両側下肢に激痛、冷感を覚え、皮膚蒼白、更に右下肢がチアノーゼを呈するようになり来院。心電図にて室上性不整脈、心房細動、左室肥大を認め、右大腿動脈撮影で右膝窩動脈閉塞が認められた。直ちに右膝窩動脈より血栓剔出、大腿動脈周囲交感神経節切除を行なった。心臓に生じた血栓が遊離し、同部に栓塞を来したものと判断された。約2ヵ月後同様の左膝窩動脈閉塞発作あり、この時も左大腿動脈撮影にて確認、右側と同じ手術を行なった。8月18日には心疾患根治手術を受けている。現在健康に生活中であるが、症例を報告すると共に、若干の考察を加えた。

7. 頭蓋異物症例について

岐大第2外科

国井洋一、二村敦郎

昭和36年以降 頭蓋異物 3例について 報告し。(症例1)は左側頭筋と頭蓋骨との間にある砲弾の破片を56年後に摘出し、左側頭部の瘻孔を全治せしめた。(症例2)は山にて転倒し右側眼窩部の瘻孔形成を生じ、2回の前頭開頭術にて大豆大の木片を硬膜内に発見摘出した(症例3)は、草刈器で作業中鉄線が巻きこみ、切れた鉄線が、左眼窩屋根後方から中頭蓋窩に穿入、之を摘出した。頭蓋外異物は、多くの場合、感染せるもの、その他神経症状を呈するもの以外は強いて摘出する必要なく、又頭蓋内異物も、感染とか、脳神経症状の原因となりうる 場合には 摘出が必要と思われる。

8. Dumping Syndrome ?

岐大第2外科

佐 治 董 豊

最近我々はInsulomaを疑わしめたDumping Syndromと思われる1例を経験したので報告した。

症例 54才 女 飲食店主

主訴 空腹時の冷汗、めまいと食直後の心悸亢進。

現病歴：昭和39年胃潰瘍にて手術、術後1ヵ月頃より主訴発来。

検査成績にて糖尿(-)空腹時血糖75~80mg/dl, Rastinon test にて約40%下降、食後又負荷後の Plethysmography, Rheogram にて末梢血流量増加、血清

尿中アミラーゼ軽度下降、等の成績を得たがDumping Syndromの早発症状と遅発症状の両方を有する症例の内に入れるべきものと思われるが、本症の根底は低血糖によるものとして説明出来、50% Glucose等静注後に食事をして症状発現を見ない点等より尚今後に疑問点を残している。

9. 教室における胸部外傷について

岐大第1外科

稲垣英知、嘉屋和夫、渡辺 裕

我々の教室で、昭和30年から41年迄に入院治療をした胸部外傷の症例は30例であつた。

これを男女、年齢別にみると、男26例に対し女4例で、年齢では40才台9例、50才台6例、次いで30才代4例で死亡例は70才男、58才女、49才の3例であつた。損傷臓器別では、胸壁軟部のみの損傷9例、骨性胸廓の損傷16例、肺損傷5例で、このうち死亡例は1例のみで、他の4例中3例は即時開胸術にて、1例は肋膜縫合のみで術後経過良好、全治退院した。原因別では交通事故15例が最も多く、次いで高所からの墜落、鈍力によるものが多い(8例)。合併損傷では顔面、頭部外傷が多く13例、白羽のの分類によるとI型が9例、II型が12例、III型5例、IV型4例であつた。肺損傷をうけ死亡した49才男の症例から、肺の高度挫滅に対しては、肺縫合よりも肺切除の方が良いと思われる。

10. 縦隔奇形腫の経験

岐大第1外科

今尾恒裕、種田耕三、渡辺 裕

れわれの教室において、現在までに経験した縦隔腫瘍14例中奇形腫は5例で約1/3をしめている。

発生部位はそれぞれ、症例1、14才女、左前縦隔、症例2、18才女、右前縦隔、症例3、17才女、左前縦隔、症例4、41才女、右前縦隔、症例5、42才女、右中縦隔であつた。このうち4例は茎をもつて左右いづれかの胸腺に移行しており、そのうち3例は、組織学的に腫瘍の壁又は周辺に遺残胸腺組織を認めている。

これらの所見は本腫瘍が胸腺内に発生したことを思わしめる。